



コミュニティ・スクールの発展過程における「熟議」の可能性：
X小学校「ふるさと大好き」ワークショップの事例から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安井, 智恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000201

コミュニティ・スクールの発展過程における「熟議」の可能性 —X小学校「ふるさと大好き」ワークショップの事例から—

安井 智恵*

概要

コミュニティ・スクールが形骸化せず、地域とともにある学校、さらに学校を核とした地域づくりに向けて発展していくためには、参加者の当事者意識や協働意識の向上、具体的行動の促進につながっていくことにも貢献する「熟議」が不可欠であると考えられる。そこで本研究では、コミュニティ・スクールに指定されて10年目を迎え、学校と地域の連携・協働の盛んなA市立X小学校を事例に、同校で10周年の節目に向けてさらなる充実と発展を目指すため実施された「熟議」の概要について述べ、KJ法を使った「熟議」の結果からコミュニティ・スクールの発展過程における「熟議」の可能性について検討した。参加者は今回の「熟議」に対する満足度が高く、熟議を通して当事者意識や協働意識が向上し、その後の具体的な行動の促進に繋がっていくと考えられる。

I. はじめに

本研究の目的は、コミュニティ・スクールの発展過程における「熟議」の可能性について、コミュニティ・スクールに指定されて10年目を迎え、学校と地域の連携・協働の盛んなX小学校のワークショップの事例から検討することにある。

保護者や地域住民等が、一定の権限と責任を持って学校運営に参画する新しいタイプの学校「コミュニティ・スクール」(学校運営協議会制度)は、2004年6月の「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正により制度化された。コミュニティ・スクールとは、学校運営協議会を置く学校であり、学校運営協議会とは、法律に基づき教育委員会より任命された学校運営協議会委員が、一定の権限と責任を持って、学校の運営とそのために必要な支援について協議する合議制の機関のことである。コミュニティ・スクールは、学校と地域住民等が力を合わせて学校の運営に取り組むことが可能となる「地域とともにある学校」への転換を図るための有効な仕組みである。コミュニティ・スクールでは、学校運営に地域の声を積極的に生かし、地域と一体となって特色ある学校づくりを進めていくことができるとされている¹。

2017年4月には地方教育行政の組織及び運営に関する法律が改正され、学校運営協議会の設置が努力義務化された。それ以降、コミュニティ・スクールは急激にその数を増やしており、設置数は2022年5月現在15,221校、導入率42.9%に上る²。このため、その形骸化が懸念される。

文部科学省(2017)によれば、地域とともにある学校の運営に備えるべき機能として、「熟議」「協働」「マネジメント」の三つがある³。

*北海道教育大学教職大学院(大学院教育学研究科高度教職実践専攻) 釧路

熟議とは、多くの当事者による「熟慮」と「議論」を重ねながら課題解決を目指す対話のことで、活発な議論により、的確に多くの人の意見を反映することができるとしている。具体的なプロセスとしては、①多くの当事者（保護者、教員、地域住民等）が集まり、「学校や地域の課題」を共有し、②そのことについて学習・「熟慮」し、「議論」をすることにより、③互いの立場や果たすべき役割への理解が深まるとともに、④それぞれの役割に応じた解決策が洗練され、⑤それぞれが納得して自分の役割を果たすようになるという過程が示されている。

コミュニティ・スクールが形骸化せず、地域とともにある学校、さらに学校を核とした地域づくりに向けて発展していくためには、参加者の当事者意識や協働意識の向上、具体的行動の促進につながっていくことにも貢献する⁴「熟議」が不可欠であると考えられる。

そこで本研究では、コミュニティ・スクールに指定されて10年目を迎え、学校と地域の連携・協働の盛んなA市立X小学校を事例に、同校で10周年の節目に向けてさらなる充実と発展を目指すため実施された「熟議」の概要について述べ、「熟議」の結果からコミュニティ・スクールの発展過程における「熟議」の可能性について検討する。

Ⅱ. X小学校コミュニティ・スクールの概要

事例校のX小学校は、人口が減少し少子高齢化が進むA市内中心部に位置し、城下町の歴史のある校区のY小学校と官公庁のある校区のZ小学校という130余年の伝統のある小学校2校の統廃合とともに、20XX年A市初のコミュニティ・スクールとして新設された学校で、統廃合により中規模校となった。

教育目標は、「心豊かで自ら求め学び合うX小の子」であり、コミュニティ・スクールとして「地域社会の一員として社会に参画する子どもの育成」を目指して、「ふるさと大好き」「あたたかい言葉をかけ合おう」を合言葉に、学校、家庭、地域が一体となって教育活動に取り組んでいる。

学校運営協議会は、月に1回程度開催されており、学校運営協議会の下部組織として、「学び部」「安全・安心部」「地域行事部」の3つの専門部会を設けて、教育活動や支援活動を行っている。X小学校のコミュニティ・スクールの組織を図1に示す。

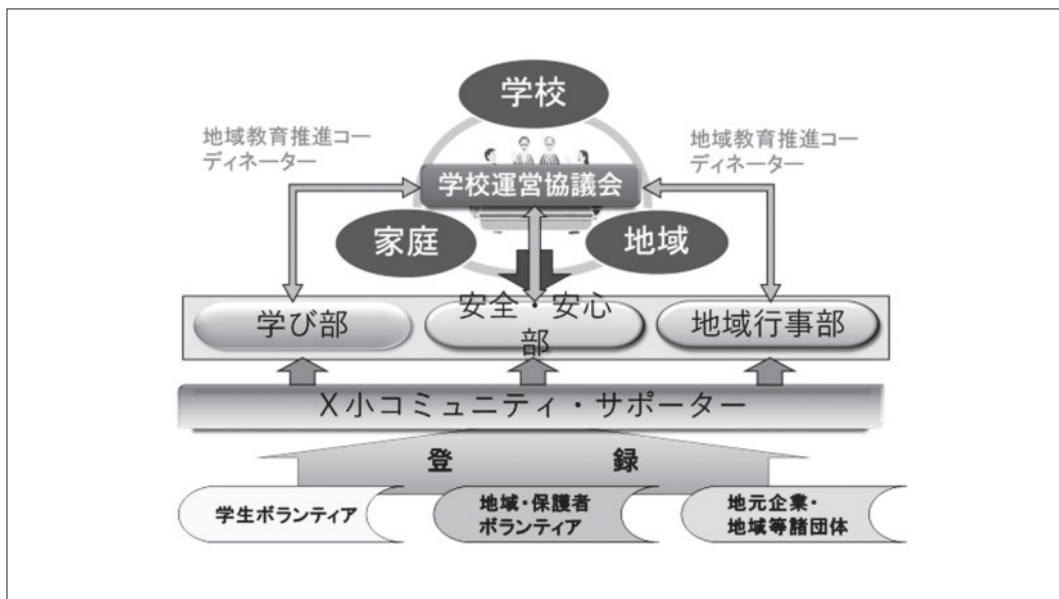


図1. X小学校コミュニティ・スクールの組織

Ⅲ. 熟議「ふるさと大好き」ワークショップの概要

X小学校コミュニティ・スクールでは、地域と協働した活動が盛んに行われているが、10周年の節目に向けてさらなる充実と発展を目指すため、学校関係者・地域住民へのアンケート調査を行った。その結果を踏まえて、学校運営協議会メンバーに限らず、専門部会委員、X小学校職員、PTAや学校関係者等が集まって、10周年の節目に向けて熟議を行う「ふるさと大好き」ワークショップを実施することとなった。

1. 熟議「ふるさと大好き」ワークショップの概要

熟議「ふるさと大好き」ワークショップの概要は以下のとおりである。

- ① 実施日時：20XX年7月X日（土）13時～15時20分
- ② 会場：X小学校メディアセンター
- ③ 参加者：学校運営協議会委員、専門部会委員、X小学校職員、学校関係者（PTA・まちづくり協議会・その他）の56人
- ④ グループ分け：A～Hの8グループ×各7人

他に各グループに1人、ファシリテーター兼記録係としてB大学の学生が参加した。

筆者が企画・進行を務め、自由に気軽に意見交流するためワークショップ形式で、KJ法⁵を用いて実施した。ワークショップの様子を図2に示す。



図2. 「ふるさと大好き」ワークショップの様子

2. 熟議のテーマ

熟議全体のテーマは、「住民総参加のコミュニティ・スクールX小学校を創り上げていくには」とした。学校関係者へのアンケート調査を基に、各グループでディスカッションする具体的なテーマを以下のように設定した。

- ① 情報活動のあり方
保護者や地域の方に、コミュニティ・スクールの活動状況等を知っていただくためにどうしたらよいか。（A、Bグループ）
- ② 活動への参加のあり方

自治会長、各種団体役員、PTA関係者の方々等に、コミュニティ・スクールの活動に参加していただくためにどうしたらよいか。(C、Dグループ)

③ 次世代への組織の継承

コミュニティ・スクールの活動を次世代につなげていくための組織の継承のあり方、新たな人材の確保はどうしたらよいか。(E、Fグループ)

④ コミュニティ・スクールX小の今後

現在、そして今後のコミュニティ・スクールX小学校をより魅力的にしていくにはどうしたらよいか。(G、Hグループ)

3. KJ法によるグループワークの手順

自由に気軽に意見交流するため、ワークショップ形式でKJ法を使ってグループワークを行った。KJ法とは、川喜田二郎氏によるラベルを用いたデータの整理分類法であり、発想法・創造的問題解決法でもある。

- ・ 1枚のカードに1つの事項を記入し、分類整理していく
- ・ グループ分けし、図解化する
- ・ 最後に文章化する

といった手順で行う。

KJ法による「ふるさと大好き」ワークショップのグループワークの具体的な手順を以下に示す。

※グループ分け：A～Hグループ（各7人）

(1) A～Hグループ内で簡単に自己紹介

- ・ 所属、氏名、自己紹介。
- ・ 役割分担を決める。
司会進行（ファシリテーター）、タイムキーパー（)
記録係兼ファシリテーター（B大学学生）

(2) 各自、X小コミュニティ・スクールについて+各グループのテーマについて、思いつくことを付箋に記入する。

- ・ なるべく短い文や単語で簡潔に書く。
- ・ 付箋1枚に1項目記入する。
- ・ 内容によって付箋を色分けする。
うまくいっていること、良い点、強み：水色
問題点、課題、弱み：ピンク
取り組み、改善策など：黄色
その他：緑

(3) グループごとに、模造紙に付箋を貼っていく。(図3)

- ・ 記入した内容を説明しながら貼る。
- ・ なるべく内容の近いものを近くに貼る。
- ・ 批判はしない。

(4) 付箋を分類する。グループ分けし、同じカテゴリーのものを線で囲む。(図4)

(5) 線で囲ったグループに表札（タイトル）をつける。

- (6) グループどうし、関連するものを線や矢印で結ぶ。
 - ・ 関連あり、原因と結果など。
 - ・ なぜ結んだかの解説を記入する。
- (7) 全体のまとめを文章で記入する。
- (8) 分析をもとに、X小コミュニティ・スクールの10年目に向けたビジョン（理想像）を描く。
- (9) 発表とまとめ（全体）
 - ・ 出来上がった模造紙を貼り、各グループ2～3分で発表する（質疑含）
 - ・ 講評：校長先生
- (10) 振り返り、アンケート記入



図3. 模造紙に付箋を貼る



図4. 付箋を分類する

Ⅳ. 「ふるさと大好き」ワークショップの熟議の結果

1. グループワーク：KJ法による熟議の模造紙まとめ（概要）

KJ法を活用することにより、各グループ活発な熟議がなされた。次に、実際にグループワークで作成したKJ法による熟議の結果の模造紙の写真の例を図5に示す。

写真の記録ではKJ法による付箋の記載内容が分かりにくいいため、分かるように書き出し各グループの模造紙をまとめた結果のデータを以下に示す（図6～図13）。

2. 参加者の振り返りから

ワークショップの終了後に参加者に記載してもらった振り返りから「ふるさと大好き」ワークショップの効果を確認したい。

(1) 本日のワークショップに参加して

「本日のワークショップに参加していかがでしたか。」の質問について、「とても良かった、まあ良かった、あまり良くなかった、全く良くなかった」の4件法で尋ねた参加者の振り返りからは、記入した方全員が「良かった」（とても良かった55%、まあ良かった34%と回答している（N=44人、未記入5人）（図14）。このことから、参加者の「ふるさと大好き」ワークショップに対する満足度は非常に高かったと言える。



図5. 次世代への組織の継承

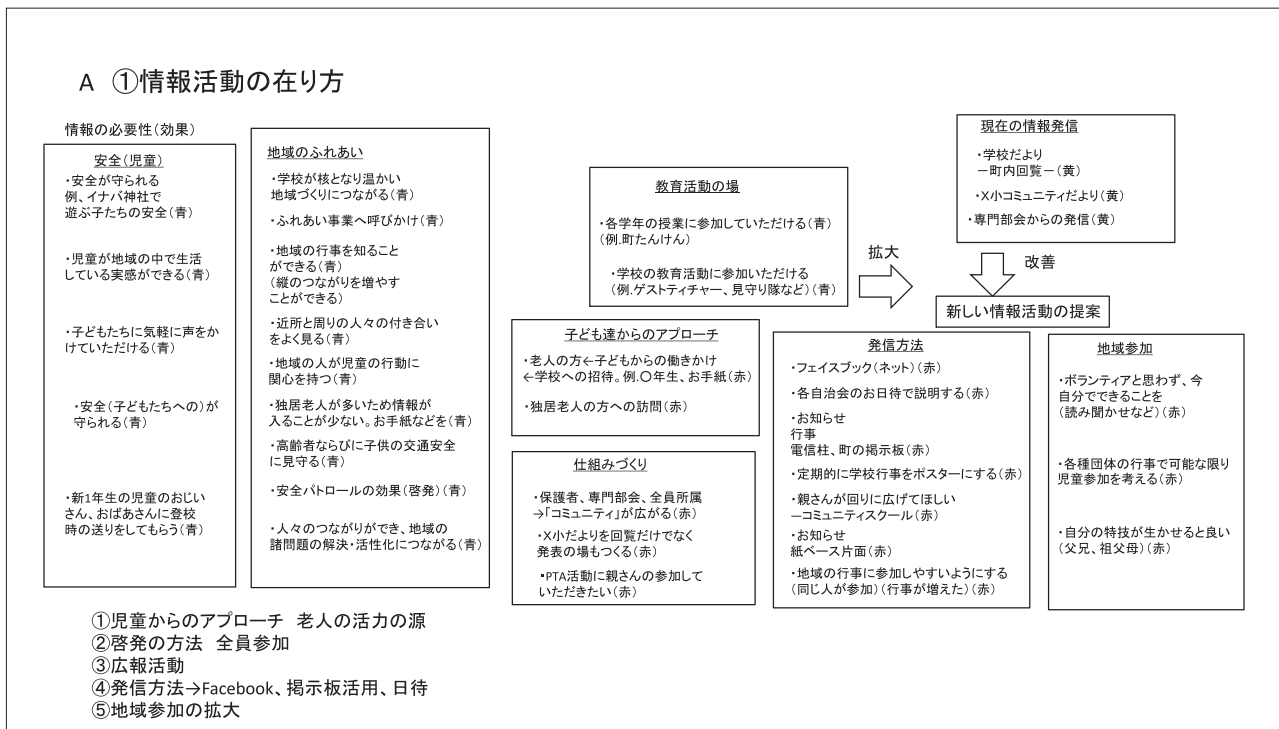


図6. Aグループ ①情報活動のあり方

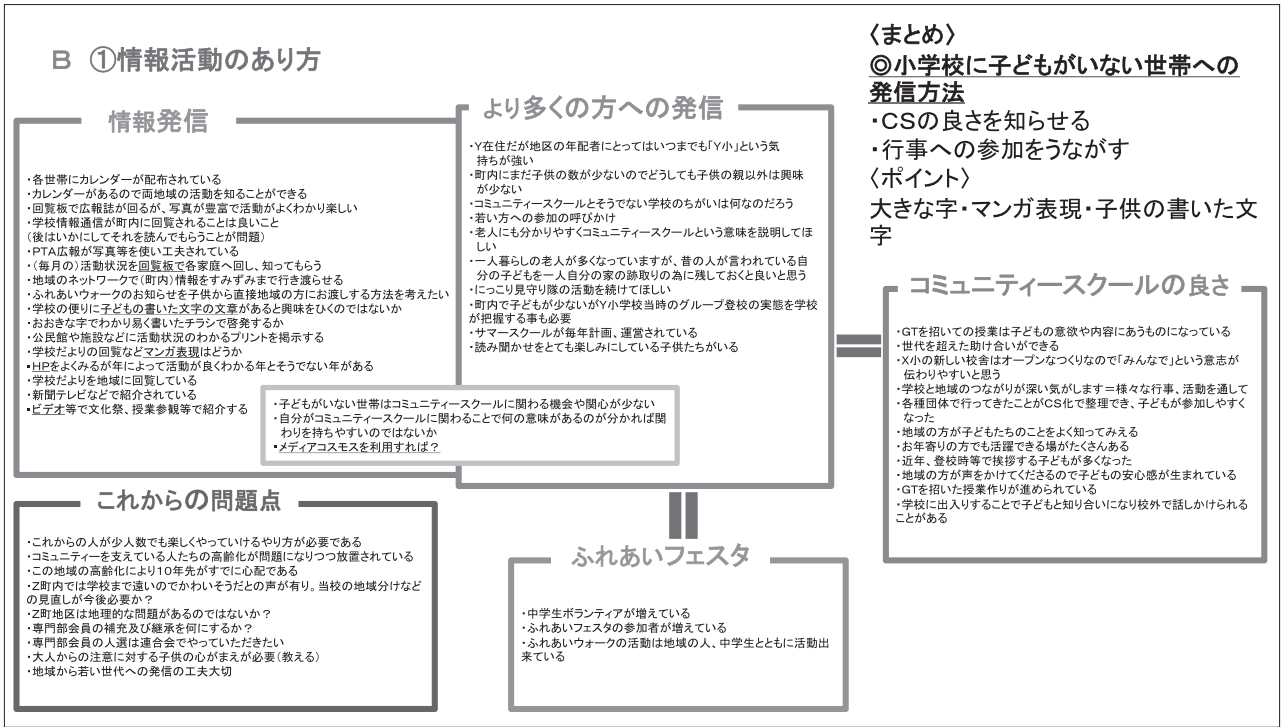


図7. Bグループ ①情報活動のあり方

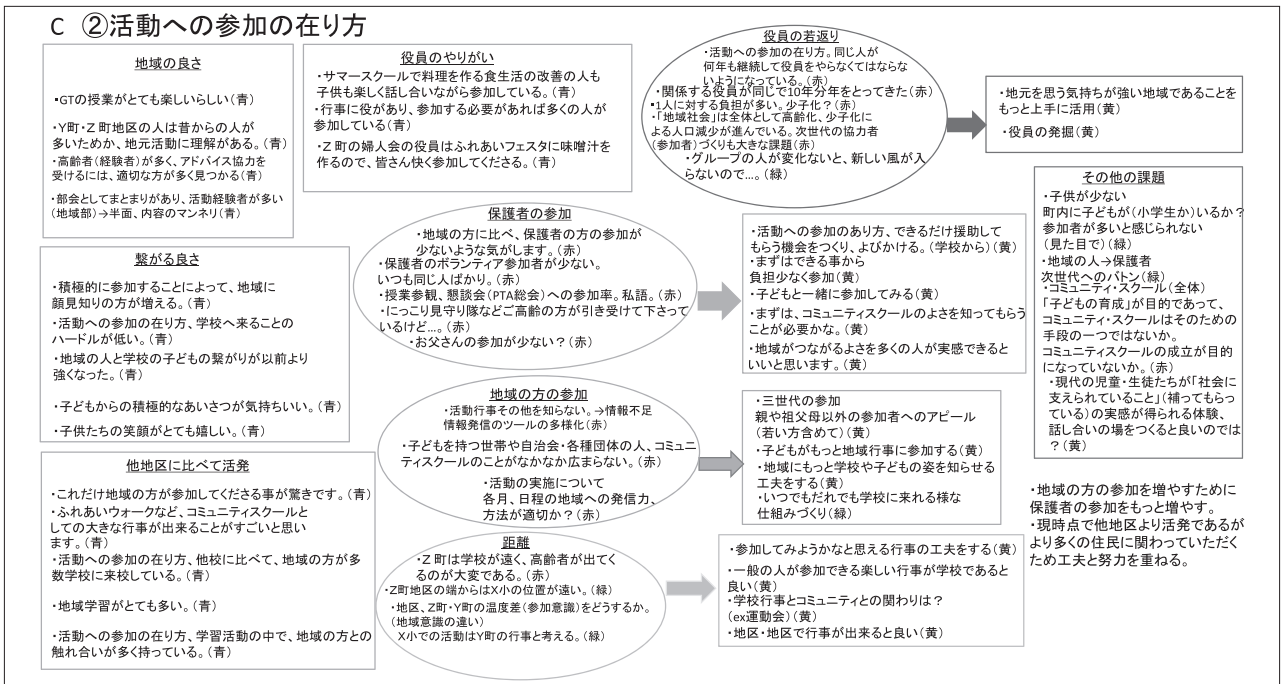


図8. Cグループ ②活動への参加のあり方

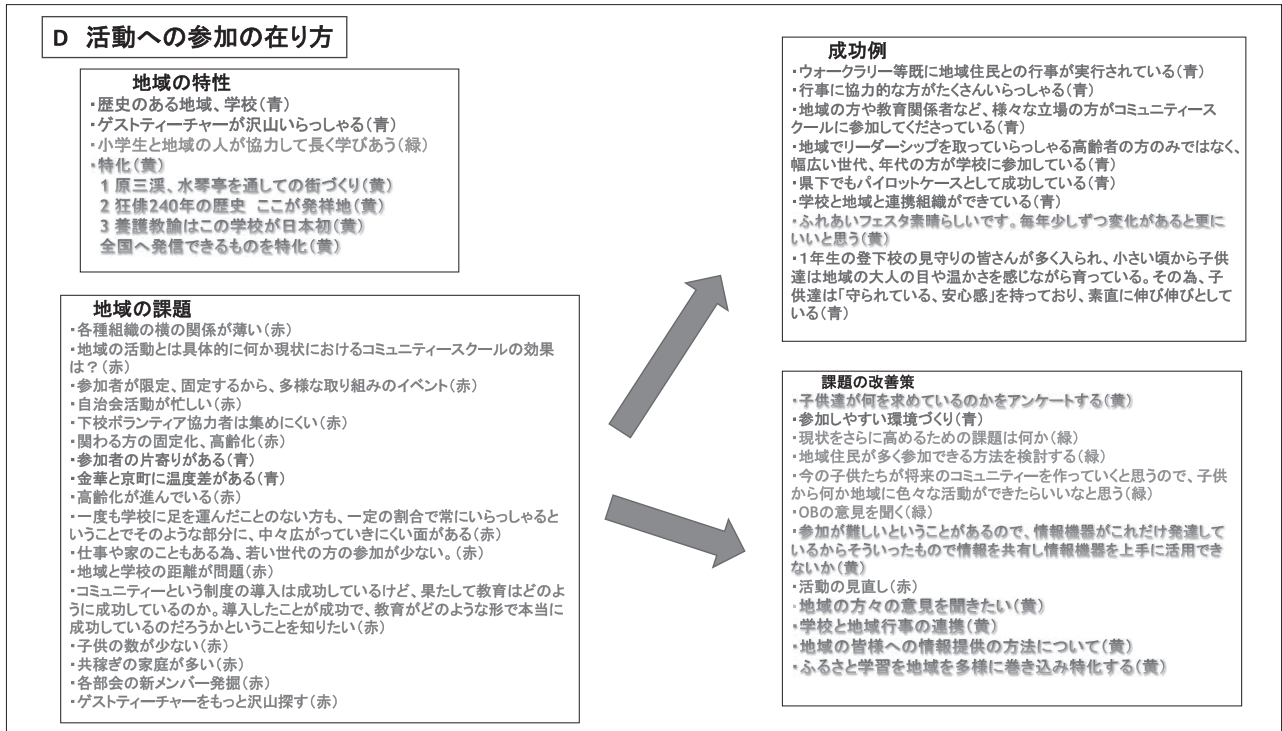


図9. Dグループ ②活動への参加のあり方

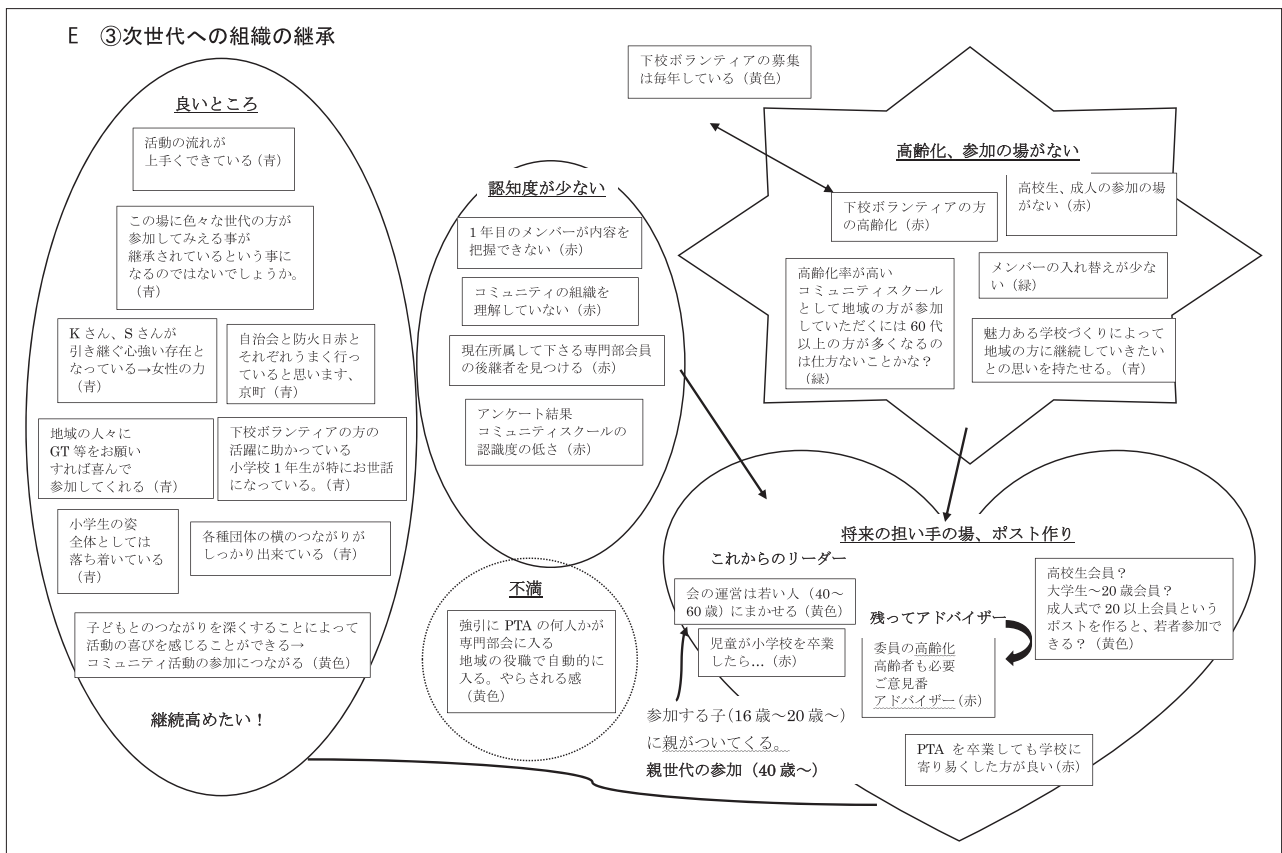


図10. Eグループ ③次世代への組織の継承

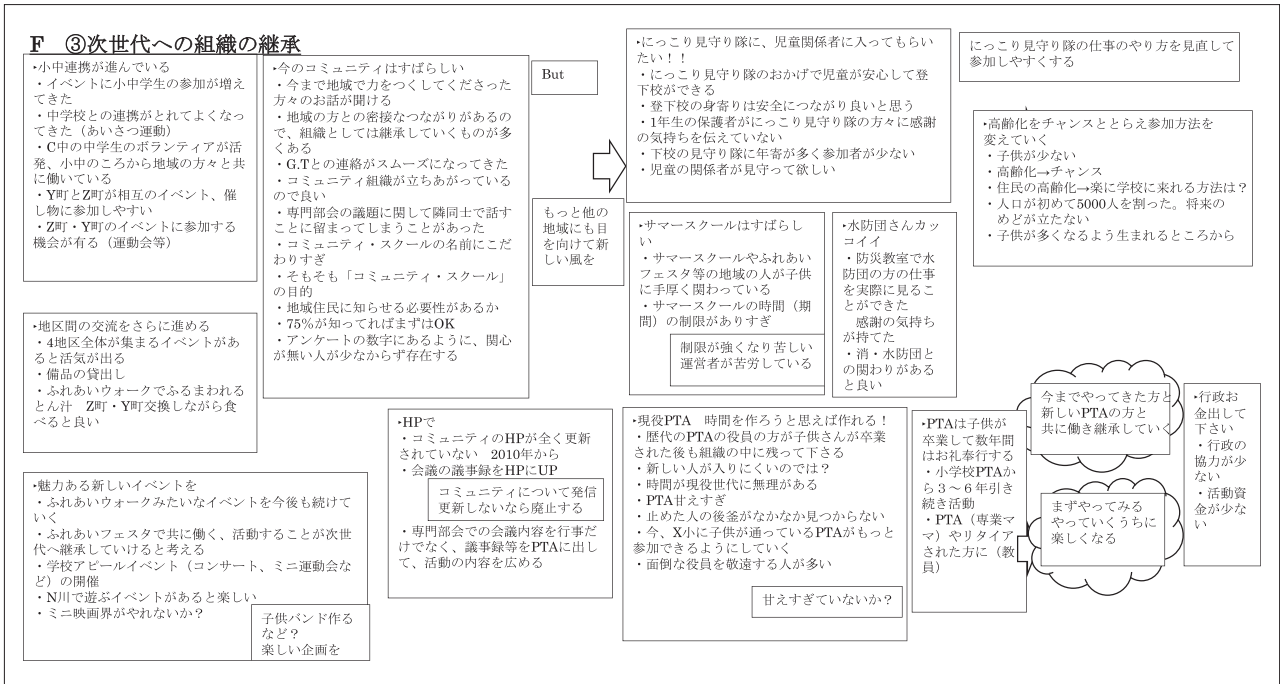


図11. Fグループ ③次世代への組織の継承

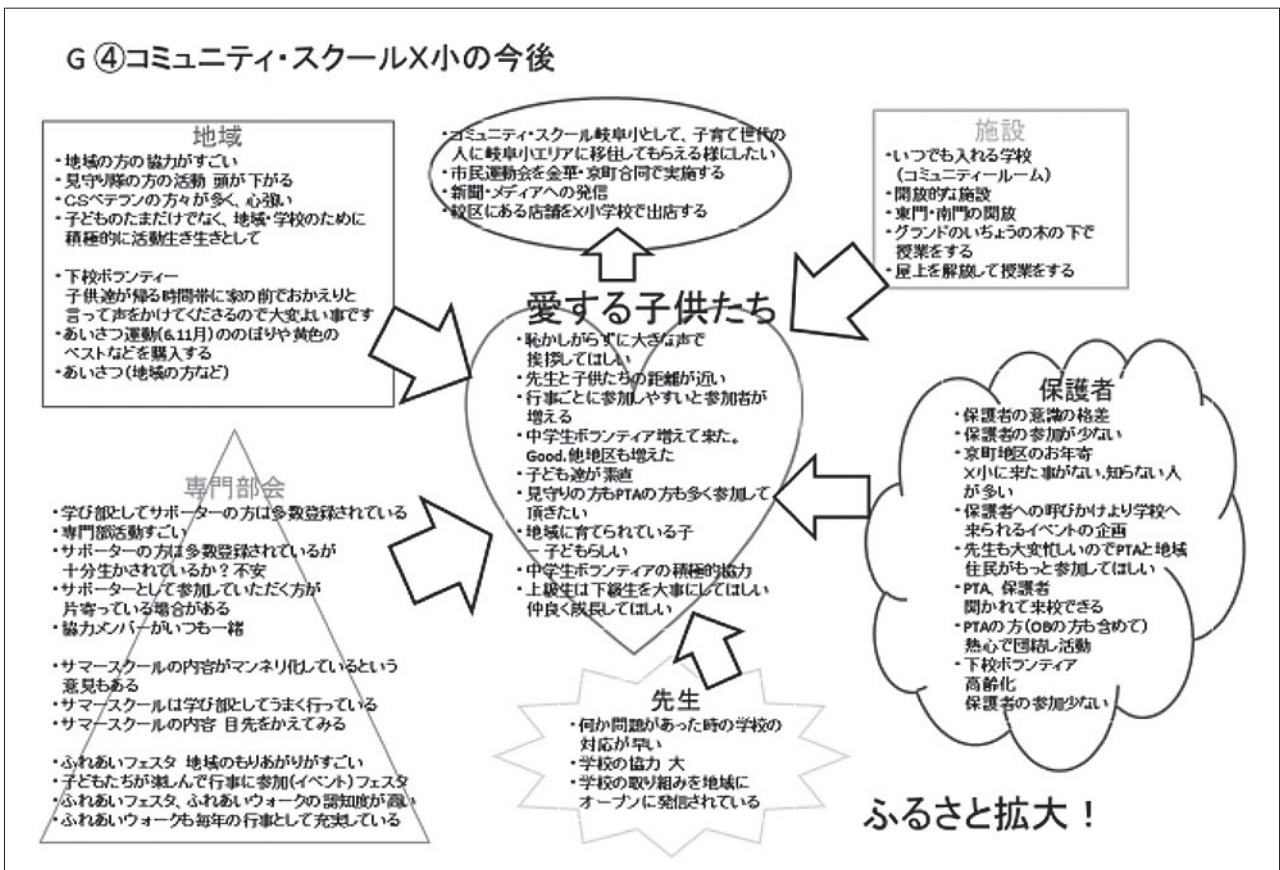


図12. Gグループ ④コミュニティ・スクールX小の今後

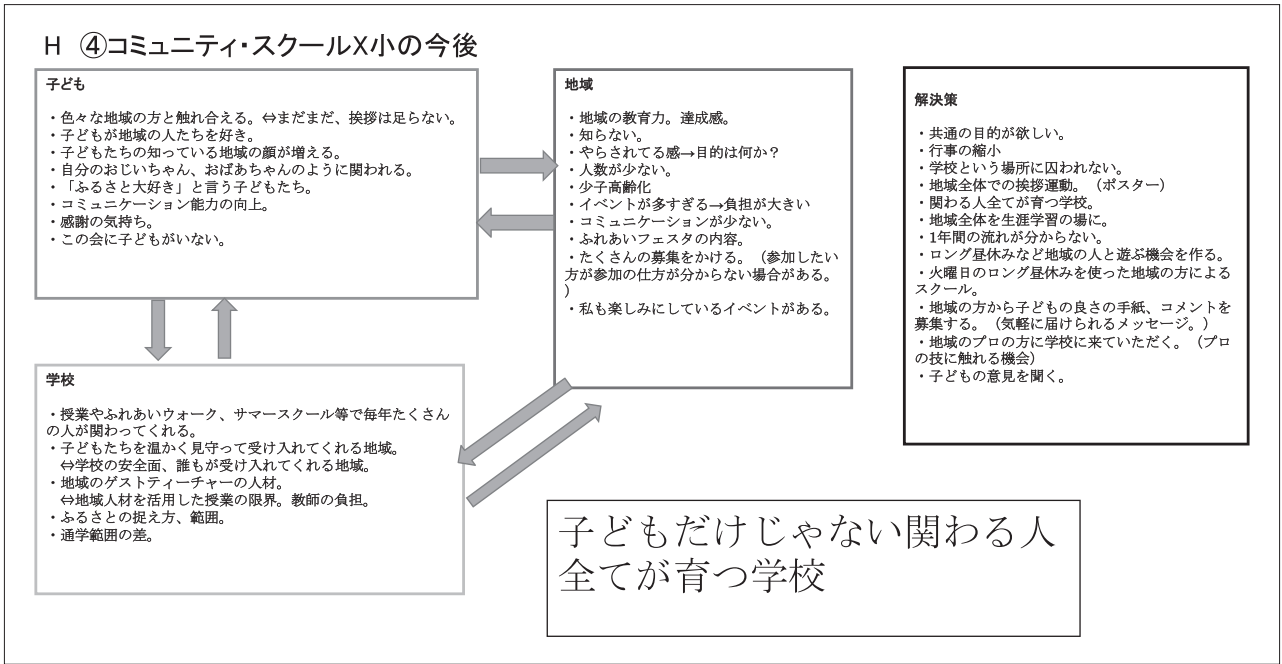


図13. Hグループ ④コミュニティ・スクールX小の今後

自由記述からは、「色々な意見が聞けて良かった」「他グループの考えも聞けて良かった」「もっとこのような機会を増やしたい」「年3回くらい行いたい」「X小に関わる人たちのX小愛を感じる」等の意見を得られた。

(1) 本日のワークショップに参加していかがでしたか

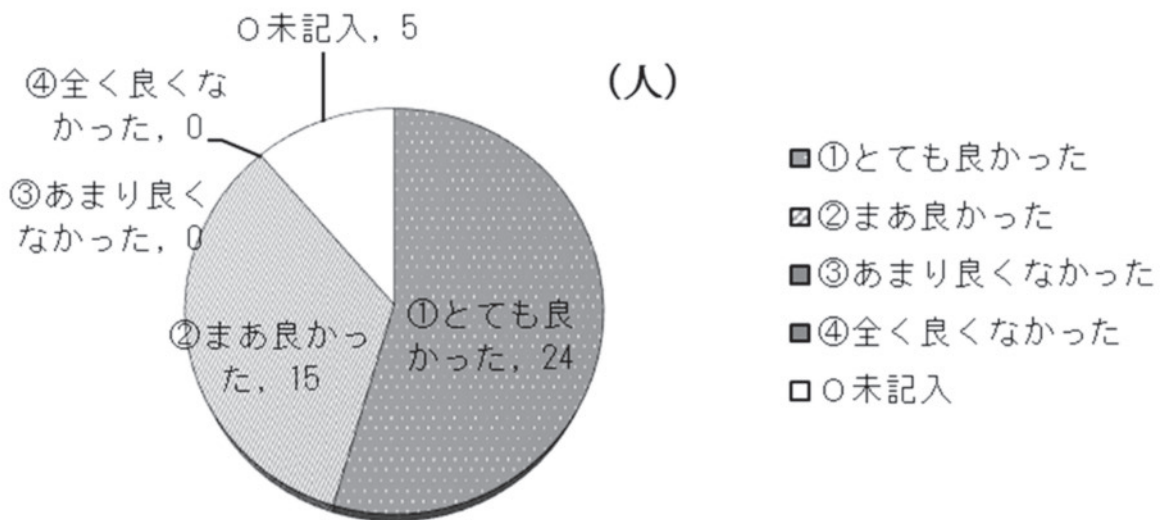


図14. ワークショップに参加していかがでしたか

(2) コミュニティ・スクールになって学校を核とした地域づくりや地域活性化が進んでいると思うか「X小コミュニティ・スクールになって学校を核とした地域づくりや地域活性化が進んでいると思いますか」の質問について「とてもそう思う、まあそう思う、あまりそう思わない、全くそう思わな

い」の4件法で尋ねたところ、参加者でワークシートに記入した方全員が「そう思う」（とてもそう思う46%、まあそう思う43%）と回答している。（N=44人）学校を核とした地域づくりや地域活性化が進んでいる、すなわち「地域とともにある学校づくり」が進んでいると認識されていると捉えることができる。

3. 参加した学生の振り返りレポートから

次に、各グループに一人ずつファシリテーター兼記録係として入っていたB大学の学生の振り返りレポートの一部を紹介し、「ふるさと大好き」ワークショップの熟議の様子を検証する。

レポートからの引用については、斜体字で示す。

ワークショップを終えて、とてもいい経験をしたと感じている。実際に参加させてもらったことで、X小学校は今、こんなことをしようとしている、子どもたちの未来のために今できることはなにかなど、目の前にある課題をどう改善していくかを意見、姿勢、思いなどから感じとることができた。

会話の頻度としては、応答が35.5%、意見が45%、笑いが17.5%、確認が22.5%であった。Gグループは全体的に穏やかな雰囲気、笑いのあるグループだった。意見が多く、確認を取りながら、皆で考えようという姿勢が見られた。そのため、スムーズにワークショップが進んだ。

X小に関わる人たちのX小愛を感じることができた。愛する子どもたちの回りには、様々な大人、地域、環境がある。子どもたちが地域を好きになり、地域に残る、地域に戻る教育を考える場として、コミュニティ・スクールが果たす役割は大きい。良いところは伸ばし、悪いところは改善してレベルUPしたコミュニティ・スクールを目指してほしいと思う。(MA)

こういった会があるから、今のX小学校があるのだと知ることができた。運営協議会、学び部、安心・安全部、まちづくりの会、教員、様々な立場の方から意見を聞くことができた。討議しながら、互いの心の距離が近くなったように感じた。(MA)

世の中、「教育は学校任せ」といった問題が起こっている。学校や地域をよりよくしようと奮闘する大人たちがいることを知って、大変刺激を受けた。X小学校を起点として、この地域の皆さんは生涯学習を行なっているのだなあとと思った。この地域のように、学校と地域とが一体となって実践されている生涯学習もあるのだということ、「知りたい」「学びたい」「よくしたい」という思いを行動に移すこと、たったそれだけのことがもう既に生涯学習の始まりなのだということ学んだ。(MA)

話し合いに参加した事でX小に関わる人たちの子供に対する大きな愛を感じる事が出来ました。子供の為に考え、話し合う大人の姿はとてもカッコいいなと思いました。子どもたちが地域を好きになり、大人になった時に自分の子供に地域の良さを伝えていけるような場として、コミュニティ・スクールがあると思いました。運営協議会、学び部、安心・安全部、教員など様々な方の沢山の思いから今のX小学校が成り立っているのだと分かりました。(TK)

話し合いをしていく中で同意や相槌、共感などの反応をしていくうちに話し合いにのめり込む姿があり、楽しんで参加出来ていました。意見だけでなく、反応は良い雰囲気になる為には必要だと思いました。(TK)

全体を通して、世代や所属も異なる方達が集まり、良い意見交換になっていたと思う。誰かの意見に対して否定的になることもなく、雑談も交えながら和気あいあいと話し合いができた。(MM)

ワークショップを振り返って、一人ひとりが意見をたくさん述べているよりも、誰かの意見を肯定的に受け止めながら、さらに話を広げているということが記録しながら感じたことだ。表に表してみると「同意」が31回の20.8%で最も多く、次に、「意見」21回で14.1%であったことから和やかで

あったことがわかる。様々な世代や地域の方が集まり話し合いを通して、X小コミュニティ・スクールを盛り上げようとしている場が新鮮であり、このような取組を行える学校や主体的になってみたいと思える人材が増えることを願いたい。(MM)

Fグループは付箋に書いたことについてそれぞれが分かりやすく説明しており、所々でなるほど、そう思う、との声が聞こえ、人の意見に対して批判する人にはいなかった。また、KJ法にしたことで、ピンクの問題点が多く出て、別の人からそれに対する解決策が出たりして、KJ法の面白さを感じた。(YS)

私は、参加する前、漠然と会議の雰囲気がギスギスした感じなのではないかと思っていた。だが、実際に参加してみると、そうではなく、朗らかな雰囲気、意見を良いやすい雰囲気であったと思う。心配していた他の人の意見への批判もなく、スムーズに話し合いが進んだと感じた。言いにくい意見もKJ法を使用したことで提言しやすくなり、新しい問題提起へと繋がった。皆さん、普段から様々な思っていることがあるようで、たくさんの意見が出たのは今後のコミュニティ・スクールやX小学校の発展として良い傾向だと考えた。(YS)

「ふるさと大好き」ワークショップに参加している方々は本当に真剣にX小のことを考えていた。中でも、実際に教育現場で働いている先生が教育の限界について、悩んでいたことを素直に地域の方に本音を話していたことはとても印象的だった。大抵、自分がうまくできないことについて、同僚でも、同職でもない人でもない人に話したいとは思わないと私の中で決めつけていた。きっとX小学校では相当、地域との連携がさかんであり、信頼関係も築き上げているのだろうと思う。そして、これらの様子から、大人が本気で学びを深めていく姿はとても奥深い人間関係が形成されていくのかなと思った。(IA)

熟議の場は、「討議しながら、互いの心の距離が近くなったように感じた」、「朗らかな雰囲気、意見を言いやすい雰囲気であったと思う。(中略)言いにくい意見もKJ法を使用したことで提言しやすくなり、新しい問題提起へと繋がった」、「話し合いをしていく中で同意や相槌、共感などの反応をしていくうちに話し合いにのめり込む姿があり、楽しんで参加出来ていました」とあるように、世代や所属も異なるメンバーが、朗らかな意見を言いやすい雰囲気、あるいは段々話し合いにのめり込みながら楽しんで参加している様子が確認できた。また、「X小に関わる人たちのX小愛を感じることができた」、「様々な世代や地域の方が集まり話し合いを通して、X小コミュニティ・スクールを盛り上げようとしている場が新鮮」というように、多様なメンバーが参加してX小愛を示し、当事者意識や協働意識を持ってX小コミュニティ・スクールを盛り上げようとする場となっていたと考えられる。

V. おわりに

X小学校では、これまで地域と協働した活動が盛んに行われているが、コミュニティ・スクール10周年の節目を迎えるにあたり、一層の充実と発展を目指すため「熟議」を企画・実施した。

参加者の振り返りからは、記入した方全員が「良かった」と回答している。参加者は今回の「熟議」に対する満足度が高く、熟議を通して当事者意識や協働意識が向上し、その後の具体的な行動の促進に繋がっていくと考えられる。

通常行われている会議の仕方の枠を取り払い、多くの参加者が初めて体験する「熟議」を行ったことで、役の上下関係などといった境界線をも取り払うことができ、朗らかな雰囲気、参加者それぞれが多様な視点に立って考えることができたのではないかと考えられる。言いにくい意見もKJ法を使

用したことで提言しやすくなり、新しい問題提起へと繋がった。「ふるさと大好きワークショップ」で各グループから提案された内容は、後日資料にまとめ、学校運営協議会で議題に取り上げ、学校運営の将来像に反映することができたことは大きな成果である。X小学校では、10周年の節目を契機に、一層の充実と発展を目指して行った熟議は、非常に効果的であった。

今後、コミュニティ・スクールのさらなる充実と実質化に向けて、コミュニティ・スクールの発展過程において、このような「熟議」の機会を一層増やしていく必要がある。

【付記】

本研究はJSPS科研費（課題番号：21K02564）「持続可能な地域づくりに向けたコミュニティ・スクールの発展過程に関する調査研究」（基盤研究（C）研究代表者：安井智恵）による研究成果の一部である。

※本調査にご協力いただいたX小学校関係者及び地域の皆様に深く感謝申し上げます。

〈注〉

*¹文部科学省『コミュニティ・スクール2017～地域とともにある学校づくりを目指して～』2017年、https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afeldfile/2018/09/03/1408715_03.pdf

*²文部科学省「令和4年度コミュニティ・スクール及び地域学校協働活動実施状況について」https://manabi-mirai.mext.go.jp/upload/2022_chousa.pdf

*³文部科学省、前掲書、2017年

*⁴文部科学省生涯学習政策局政策課「熟議～現場の課題解決と教育政策形成の好循環～」『情報教育資料』31、実教出版、2011年、pp.5-8

*⁵川喜田二郎『続・発想法—KJ法の展開と応用』中公新書、1970年

